

学 位 論 文 要 旨

氏 名 越智 麻里奈

論 文 名 自閉スペクトラム症を背景にもつ不登校の臨床的特徴

学位論文要旨

緒言

不登校の背景因子として、生物学的要因、心理的要因、社会的要因を考慮する必要があり、生物学的要因の一つに自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder : 以下 ASD) をはじめとする神経発達症がある。近年、発達障害における不登校の割合は高いといった報告が散見されている。また、臨床現場でも不登校を主訴に受診し、生育歴や現症を聴取して診察していく中で、発達障害が背景に存在することが明らかになることも少なくない。しかし、不登校と発達障害の関連について、詳細な検討は十分には行われていない。私は、不登校の予防や対策において発達特性に沿った関わりが大切と考え、不登校を呈した ASD 患者の臨床的特徴を明らかにすることを目的に、診療録を用いて後方視的に検討した。

対象および方法

2012年1月～2016年12月に愛媛大学医学部附属病院精神科を初診した患者のうち、初診時に不登校を呈していた18歳以下の患者246名を対象とした。

不登校の定義は、英国で使用されている Berg の基準を用い、①遷延化した欠席状態に至るほど深刻な登校の困難さを示している、②登校を予測した際に深刻な情緒的混乱を生じる、③登校すべき時間に親も承知のうえで家庭にとどまっている、④盗み、うそ、放浪、破壊行動などの深刻な反社会性障害が存在しない、という4条件をすべて満たすものと定義した。

診断については、DSM-5 の診断基準を用いて後方視的に行い、診療録に基づいて、ASD の有無別に臨床的特徴について比較検討を行った。なお、不登校の要因については、文部科学省の平成24年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を参照し、作成した。複数回答可とした。

統計解析は Mann-Whitney U test、 χ^2 二乗検定を用い、不登校の要因については、ASD の有

氏名 越智 麻里奈

無でロジスティック回帰分析を行い、有意水準は $p < 0.05$ とした。

結果

ASDの有無による患者背景比較は、ASDなし群が148名(男子51名、女子97名)、ASDあり群が98名(男子69名、女子29名)で、ASDあり群は男子が有意に多かった($p < 0.001$)。不登校開始年齢はASDなし群が 13.1 ± 2.4 歳、ASDあり群が 11.9 ± 2.3 歳であり、ASDあり群がなし群に比べ有意に低年齢だった($p < 0.001$)。初診時の社会機能は、ASDあり群がなし群に比べ有意に低かった($p = 0.043$)。兄弟の有無、両親が片親かどうか、薬物療法の有無、不登校開始から初診までの期間は、ASDの有無で有意な差はなかった。

ASD患者の不登校に影響を与えている要因としては、性別、不登校開始年齢、いじめ、入学、編入学時、進級時の不適応が有意に関与していた。性別で分けて検討してみると、男子では不登校開始年齢といじめがASDの不登校に有意に関与していた。女子では不登校開始年齢、いじめ、入学、編入学、進級時の不適応、身体症状がASDの不登校に有意に関与する一方、不安などの情緒的混乱はASDの不登校には関与が有意に少なかった。

まとめ

ASD患者の不登校発症時期が、一般より低年齢であるという報告が散見されている。本研究でもASD患者は、非ASD患者と比較し、不登校の発生時期が有意に低年齢であった。また本研究では、不登校の要因として、ASDの女子では、不安・情緒的混乱の関与が有意に低く、身体症状などが有意に関与していた。ASDの女子は、自身の感情を理解することの困難さから、不安・情緒的混乱をきたしにくく、身体的不調として表出されている可能性があると考えられた。

さらに、ASD患者の不登校において、男女ともに、いじめが有意に関与していた。発達障害があると、いじめ被害が多いとの報告は散見される。ASDの特性である対人関係や社会性、コミュニケーションの困難さから、いじめにつながっていることが考えられる。より早期から特性を把握し対応することが、ASD患者のいじめや不登校の予防につながると考えられた。

倫理的配慮：この研究は、愛媛大学医学部の倫理委員会によって承認されている。

キーワード (3~5)	自閉スペクトラム症 不登校 欠席 介入
-------------	------------------------------